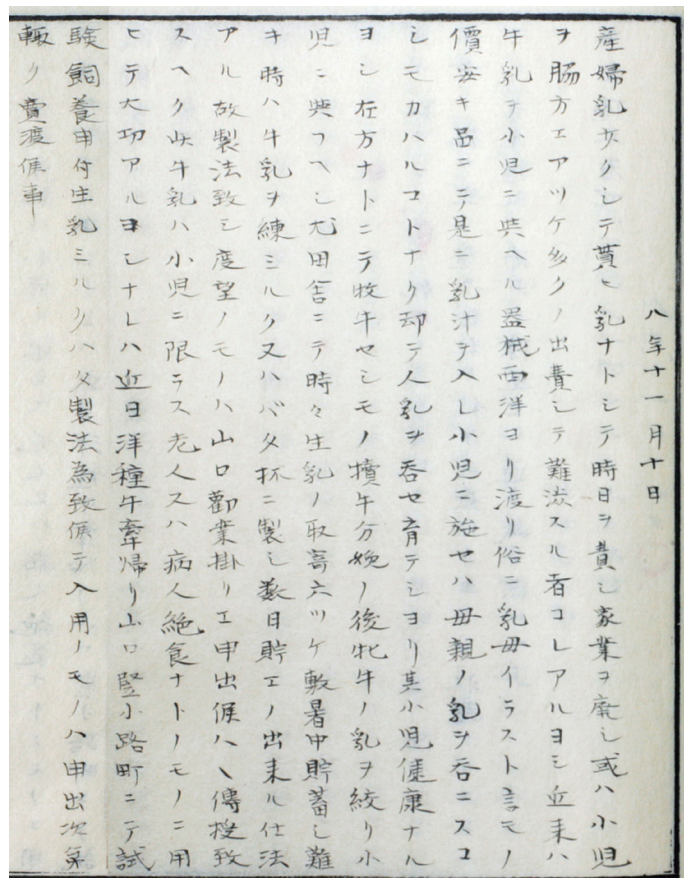


文明開化（牛乳の奨励）



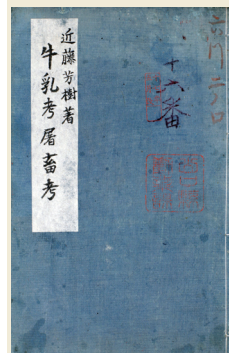
* 明治期山口県布達類17「山口県布達達書」（明治8年11月10日付「牛乳ミルク等販売方、および米種取様の事」）

解説

近代化を目指す中で、わが国に欧米の文化がさかんに取り入れられました。レンガ造りの洋風建築、人力車や馬車、洋服や洋食などの新しい洋風文化は、横浜や神戸などの開港地から全国へ広がり、しだいに伝統的な生活を変えていきました。

左の写真は1875（明治8）年11月10日付で出された山口県の布達です。当時、日本には牛乳を飲む習慣がありませんでしたが、この布達の中で、「産婦乳少クシテ、貰ヒ乳ナトシテ、時日ヲ費シ、家業ヲ廢シ、或ハ小児ヲ脇方エアツケ、多クノ出費シテ難渋スル者コレアルヨシ」という現状をあげ、その改善のために牛乳を小児に飲ませることを奨励しています。人々の牛乳に対する抵抗感を減らすために、「母乳で育てるよりもむしろ健康に育つ」「病気の者や老人などにも良い」など栄養面での利点を強調するとともに、新しく西洋から入ってきた「乳母いらず」と呼ばれた哺乳瓶も安価に手に入ることをPRしています。

また、田舎で牛乳が取り寄せられない場合や夏場で保存がきかない時には、練乳やバターにすると、数日間保存がきくことを紹介し、これらの製造方法を習得したい者は山口勸業掛に申し出るように勧めています。さらに、試験用の洋種牛を飼育して牛乳等を製造するので希望者には販売する、とあります。



* 石川卓美文庫227『牛乳考屠畜考』は、1872（明治5）年、山口県の国学者近藤芳樹によって著されたものです。古代、朝廷において牛乳が飲まれ、牛馬の肉が食されていたことを述べ、栄養面からこれらを摂取すべきことを説いています。

* 当館には、このほか文明開化に関する資料として、太陽暦が採用された1873（明治6）年の暦や航路安全のために設置された灯台についての資料があります。